

「断り」にみる配慮表現の動向

岸江 信介

1. はじめに

ことばをどのように記述し、分析するかといったところからことばがどのように運用されるかということが昨今、注目されるようになり、談話分析をはじめ、語用論的な立場から配慮表現の研究が盛んになりつつある。

対人コミュニケーションにおいてはあいさつや感謝はもとより、依頼や注文、断りや謝罪、褒めや誘い、あるいは忠告や注意喚起に至るまで、さまざまな発話（言語）行為をみることができる。これらの言語行為を観察することによって言語行動の傾向やバリエーションを把握することができる。

戦後、ものの見方や価値観が大きく様変わりし、対人コミュニケーションにも大きく影響を及ぼすことになった。戦後というよりも、特に高度経済成長期のあと、徐々に言語生活自体にも変化が現れ、例えば、目上／目下という間柄でのやりとりにおいて従来直接的にもの言うことが一般的であったが、目上の者が目下の者に気遣いながら話すという場面が多くみられるようになった。この傾向は現在でもさらに拍車がかかり、目上／目下、あるいは親疎を問わず、コミュニケーションの上では配慮することが欠かせない条件とまでなった。その結果、部下や後輩など目下の者にも気配りをしながら直接的にもの言うことを避け、間接的に表現する言語行動が多くみられるようになっていく。

昨今、若者達の言語行動にもこのような傾向が多々みられるようになった。もちろん若者はハラスメントとは関係なく、間接的なもの言いをよりいっそう選択しているケースが多いように思われる。いくつか例を上げると、例えば、依頼する時、「～してもらえないでしょうか」とか「～して頂けないでしょうか」とか「～して下さいませんか」といったような、丁寧ではあっても行為を求める表現を選択せず、むしろ避ける傾向がある。依頼表現には中高年世代と若年世代で明らかに世代差があると思われるが、若い世代では依頼表現に代えて許可を求める表現をよく使用する傾向がみられる。例えば「～してもらってもよろしいでしょうか」といった表現には行為要求を前半ではしているものの、「よろしいでしょうか」と、その行為要求に対して相手の許可を求めている。こうすることで、相手への気遣いが生じる。繰り返しになるが、現代の若者は丁寧な敬語を交えた依頼表現よりも、このような許可を求める表現を好む傾向が強いようである。

依頼表現にみられるこのような特色は、世代差のみならず、地域差といった観点からも言及できそうである。特に日本の方言では、東日本と西日本の地域差が顕著であり、依頼表現などを含めて配慮表現全般においても特に東西での差異があると思われる。

そこで以下では「方言表現論の最前線」というテーマでの議論のもと、配慮表現の「断り」という言語行為を取り上げ、これまでに進めてきた研究の成果を振り返りながら私見を述べることにしたい。

2. 配慮表現の場面差・世代差・東西差を探る—敬語表現との関連に注目して—

対人コミュニケーション上の発話行為に重点を置き、配慮場面での発話行為にみられる言語運用や機能について分析を行う。全国を対象に行った配慮表現に関する調査結果を示しながら統計的視点や言語地理学的視点などから見出せる特徴（場面差や地域差など）について明らかにしたい。

まず断っておきたい点として、この内容に関連してすでに清水勇吉・石田基広・岸江信介(2011)、岸江信介(2014)、岸江信介(2018)において調査研究の成果の一端を発表したことがある。今回、これら先行研究では扱えなかった大学生のデータを紹介し、調査結果の比較を進めるが、重複する部分がある点は断っておきたい。

配慮表現の地域差について調査研究をする場合、方言語彙の地域差には現れない差異がみられる。配慮表現の地理的な研究を進めるなかで明らかになったことだが、例えば近畿地方において北近畿と南近畿との間には待遇表現（敬語表現）の上で大きな差があることが判明した。これまで熊野灘や和歌山地方、奈良県南部など部分的には指摘されていたものの、国立国語研究所編(2006)『方言文法全国地図』6などから近畿地方の敬語形式の分布については近畿地方北中部地方と南部地方との間に際立った地域差が認められないが、南近畿地方の回答の多くは、いわゆる方言敬語形式ではなく、共通語と同形の敬語形式が多いことに気づく。これは、戦後、地域社会においても高学歴化が進んだこと、地域社会といっても第一次産業従事者だけではなく、商業、金融業、医療・福祉・教育などのサービス業などの第三次産業従事者が圧倒的に増えたため、地域社会独特の言語面での特色が薄らいってしまったことなどによって地域言語における方言敬語の存在の有無が見えにくくなったためであると考えられる。近畿地方南部では対人コミュニケーションにおいて共通語的な敬語形式を使用する者が増えたため、地域に密着した方言の敬語形式が乏しいという事実が隠れてしまい、無敬語地域の判別がつきにくくなったとみられる。このような傾向は、近畿地方南部のみならず、北関東地方においても調査結果から明らかとなっている。

敬語表現と配慮表現は異なるが、言語運用上、特に地域差に関連して考慮しておく必要があろう。



図1 待遇表現の地域差 (有敬語地域vs無敬語地域)

3. 依頼に対する断り表現について

これまで配慮表現に関する調査研究を行ったうち、全国の中高年層を対象に行った調査から、「断り」に関してみられた特徴について触れてみることにしたい。これまでに全国各地の中高年層（調査時、50歳以上の方）を対象とした通信調査と全国各地の大学生を対象としたアンケート調査を実施した。以下にその概要を記す。

(1) 全国大学生アンケート調査

調査期間：2007年10月～20011年10月

調査対象：全国各地域に生まれ育った大学生（調査時）の方

回答者数：743名

調査方法：全国各地域の大学の教員に大学毎でのアンケート調査を依頼し、調査票を回収した。

(2) 中高年層を対象とした全国通信調査

調査期間：2015年7月～2016年9月

調査対象：全国各地域に生まれ育った50歳以上（調査時）の方

回答者数：867名（ただし、男女の比率は男性が多い）

調査方法：全国の市町村教育委員会を通じ、各地域の公民館に調査依頼した。調査票の送付および受理は郵便を利用した。

これまで特に（2）の調査結果についてはすでに岸江信介（2018）などで公表しているが、（1）の大学生アンケートの調査結果は未公開であり、今回、以下ではこれら両者の結果の比較を行うことにした。

（1）（2）の調査には、実施時期に開きがあるが、調査票で扱った質問項目の大半は同じ内容にした。（2）の調査項目を決める際に同じ質問項目を設定することより、世代差を軸にした比較が可能になると判断したためである。

（1）（2）の調査項目のうち、同じ内容の「依頼に対する断り」に関係した質問項目を取り上げ、以下、その結果についてみることにしたい。

表 断り表現に関する質問項目

【場面設定】いつもたいへん世話になっている「先輩（目上）」／子供の時からずっと親しくしている「後輩（目下）」から来週の日曜日に引っ越しをすることになったので手伝いに来てほしいと頼まれました。しかし来週の日曜日はあいにく自宅に法事があるため、自宅に親戚中が集まります。家族の者からも必ずこの日は自宅にいてほしいと以前から頼まれていたとします。結局、この「先輩（目上）」／「後輩（目下）」からの依頼を断らなければならなくなりました。

この時、それぞれどう言って断りますか、自由に回答をお書き下さい。

元来、方言学では言語形式の地域差や世代差を明らかにするような調査で、意味を正確に説明し、その意味に対する形式を問うという方法で行われてきた。つまり、上記のような質問項目で、自由に回答してもらうという方法はあまり採られてこなかった。自由に回答を求めようとする意図は、回答全体を対象に運用面や機能面といったところから「断り」がどう表現されているかについて注視するところにある。回答のある部分を切り取って、例えば語彙や文法などの形式、あるいは狭い範囲に限定した表現形式に焦点を当てるという行き方ではなく、「断り」という言語行為そのものがどのように組み立てられているかに着目したいと考えたからである。

ところで、断る際に相手の意向に添えなかったことに対し、謝罪表現が多くの回答の中にみられる。方言学の立場からはこれらを抽出して地域差や世代差あるいは場面

差といった観点から言及することも重要である。

前半では、回答者全員の回答傾向を統計的に処理し、その結果の一部を紹介したい。また、後半では謝罪表現の地理的分布について取り上げ、おもに地域差の観点から述べることにする。

ところで、どの回答も、以下の1～4で示すように「断り」を構成する要素をパターン化することが可能である。「断り」に入る前の「前置き」「謝罪」のほか、断るための「理由」は大半の回答にみられる。また、直接「その日は行けない」とか「その日は都合が悪い」といった「不可能」の表明や、相手の意向に沿えるように振る舞いたいという「共感」、その日は協力できないが別の日なら手伝えるといった「代案」の提示なども、多く見受けられる。

1. お手伝いしたいのですが、その日は法事がありまして。すみません。

前置き

理由

謝罪

2. 申し訳ないですが、その日は家で法事がありますのでお手伝いできないです。

前置き+謝罪

理由

不可能

3. すんまへんなあ！行きたいけどその日は家で法事せならんので無理やな。

謝罪

共感

理由

不可能

4. ちょっと今回は用事があって行けないけど来週の日曜日なら行けますよ。

前置き

理由

不可能

代案

このように「断り」の発話行為そのものの構造を「前置き」「理由」「謝罪」「不可能」「共感」「代案」などの意味公式のレッテルを貼り、「断り」の発話行為の構造がどのようになっているかを把握した上で分析することも可能である。以下では、前置きや謝罪といった表現があるか否か、謝罪が先かあるいは理由が先か、手伝いに行けない(不可能)ことに言及しているかどうかなど、「断り」の回答を吟味し、場面差・世代差・地域差(東西差)がどうなっているか、分析してみたい。

3.1 前置き表現について

「断り」という場面では発話の冒頭で「大変、申し訳ありませんが」「悪いんだけど」「すみませんが」など、いずれも謝罪を伴った前置き表現が目立つ。

目上／目下それぞれの場面では図2、図3ともに目上には前置き表現をよく使うが、目下にあまり使わない($p<0.01$)ことからともに場面差がみられた。世代差については図2、図3の比率より中高年層の方が大学生よりも目上に対しても目下に対しても前置き表現をより多く用いていることがわかる。

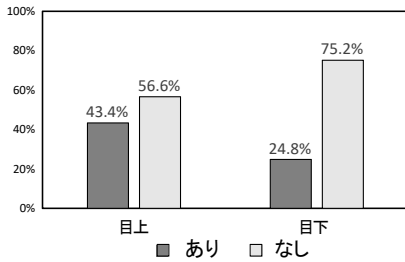


図2 中高年層：前置き表現の有無

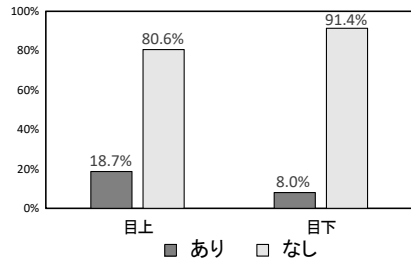


図3 大学生：前置き表現の有無

地域差の観点から中高年層では目上の場合も目下の場合も東西差はなかった。一方、大学生では東西差がみられ、東日本の方が西日本より目上に対して前置き表現を用いる傾向 ($p<0.01$) がある。目下に対しては、東西差は認められなかった。

3.2 謝罪表現について

依頼に対して断らざるをえないという場面設定では、どうしても謝罪（詫び）表現が不可欠となる。目上への謝罪表現では「申し訳ありません」「すみません」などが多く、目下には「ごめん」「悪い」といった形式が多い。形式間に違いはあっても謝罪表現が回答者一人一人の「断り」の中に含まれているかどうかで判断し、データを集計した。中高年層の回答では目上に対して謝罪表現が90%、目下に対しても80%をこえている。ただし、目上と目下に対しては有意差 ($p<0.01$) がみられた。一方、大学生の場合は目上に対して使用率が96.3%、目下に対しても94.0%とさらに増え、目下／目上の場面の差による有意差はない。

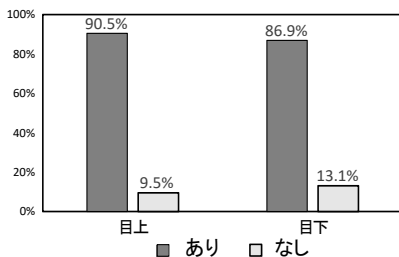


図4 中高年層：謝罪表現の有無

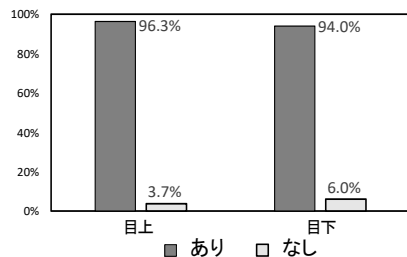


図5 大学生：謝罪表現の有無

世代差はすでに述べたように大学生の使用が目上と目下ともに高いため、目上も目下のいずれも有意差 ($p<0.01$) がみられた。

東西の地域差はどうであろうか。中高年層では、目上の場合、目下の場合、いずれも地域差（東西差）はなかった。同様に大学生の場合も目上に対しても目下に対しても東

西差はみられなかった。

3.3 謝罪が先か理由が先か

すでにみたように回答の多くに「謝罪」と、断らざるをえない「理由」が含まれているが、発話行為では「謝罪」を先に言うか、それとも「理由」から先に言うか、どちらを優先するか、検討する。

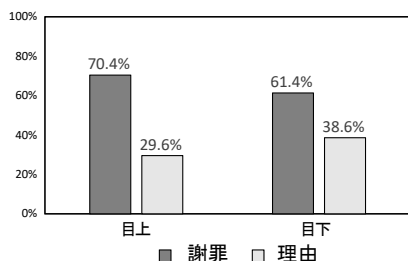


図6 中高年層：謝罪が先か理由が先か

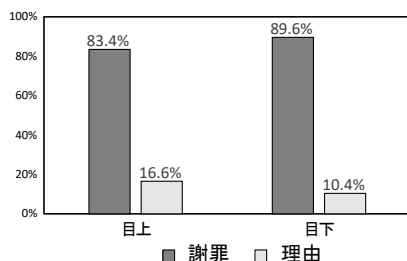


図7 大学生：謝罪が先か理由が先か

図6・図7は目上と目下で差が生じるかどうか、場面差をみたものである。まず、図6の中高年層の回答では目上の場合も目下の場合も「謝罪」を先に述べるのが多いが、目上には対する場合、「謝罪」が70%をこえており、目下との間に有意差がある($P<0.01$)。また大学生の場合は目上／目下に対し、「謝罪」がともに80%をはるかにこえており、しかも中高年層とは異なり、目下に対して「謝罪」が多くなっている($p<0.01$)。特に目下に対して「謝罪」が多い理由として、大学生では全国的に「ごめん」類の謝罪形式が使われるためだと考えられる。

世代差では、目上／目下いずれの場合にも、中高年層と大学生間で有意差がある($p<0.01$)。すでに述べたように目上／目下いずれも、大学生の方が「謝罪」が多いことが有意差の理由である。

東西差では、中高年層で目上に対して東日本で「謝罪」が多いことから有意差($p<0.05$)がみられたが、目下にはみられなかった。大学生の場合は目上／目下いずれも東西差はみられなかった。

3.4 手伝いに行けないことへの言及

「断り」の発話行為では、「都合が悪い」「別に用事がある」など理由を述べるに止め、例えば「手伝いに行けません」とか「引き受けられません」など、依頼に応えられないことを直接言及するかと言えば必ずしもそうではない。このような直接の言及をここでは「不可能の表明」としておく。「その日は家で法事がありまして申し訳ないですね」というように「理由」と「謝罪」だけを述べることで、あえて手伝いに行けないことに触れなくても、つまり不可能の表明をしなくとも十分に「断り」の意志は相手に伝わる。

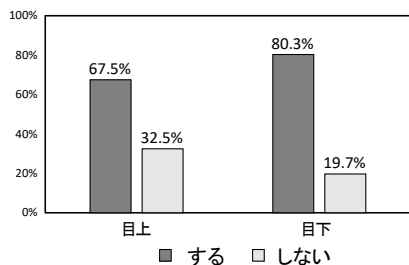


図8 中高年層：不可能の表明

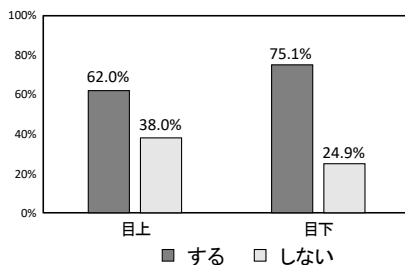


図9 大学生：不可能の表明

というよりもストレートに行けないことを伝えるよりも間接的に断るということが相手への配慮につながると考えることもできそうである。となると、例えば、目上／目下といった場面で、有意差が現れるのかどうか問題となる。

中高年層では、目上には不可能の表明をしないが、目下にははっきり言う傾向があり、場面差がある ($p<0.01$)。同じく大学生のケースでも目上／目下では明らかな場面差がみられ、不可能の表明は目下に対して多く現れ、目上にはこの種の言及はしない傾向がある ($p<0.01$)。また、中高年層と大学生の間に世代差がみられ、大学生は目上／目下ともに不可能を表明することが少ない傾向にある。東西差については、中高年層と大学生ともに目上／目下いずれも有意差はみられなかった。

4. 謝罪表現の回答形式の傾向—地域差を探る—

上述したように「断り」の発話行為には謝罪表現が多くみられる(図4、図5参照)。今回の調査を通じ、謝罪表現の地理的変異と世代変化が明らかになった。以下では、そ

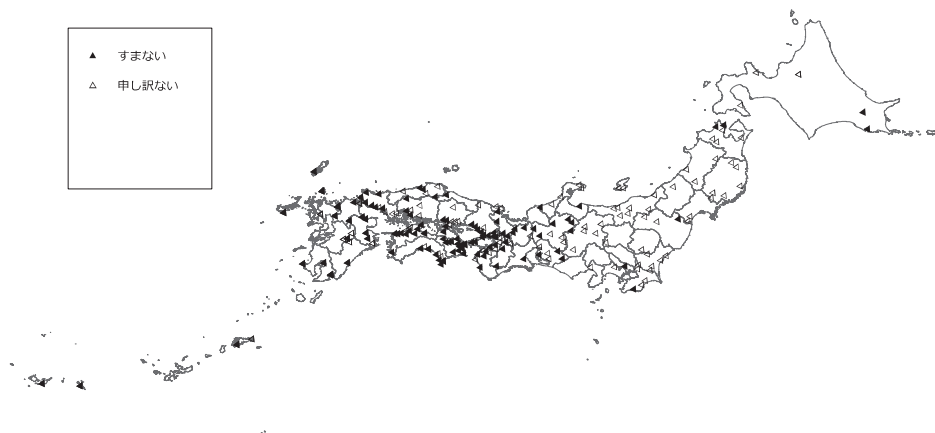


図10 中高年層：目下に対する謝罪表現「すまない」VS「申し訳ない」

の調査の結果から謝罪表現の分布傾向と特徴について触れてみたい。中高年層の表現形式には地理的な分布対立を示すものが多々みられる。いずれも全国共通語と思われる表現形式であるが、東西型の分布を示すものもあり、興味深い。

図10は目下に対するもので西日本を中心に分布する「すまない」(西日本で回答が多かった「すまん」を含む)と東日本を中心に分布する「申し訳ない」の2つの形式を取り上げ、地図化したものである。目下に対してどう言うかを聞いたものであり、「すみません」「申し訳ありません」といった丁寧形式がないわけではないが、少ない。

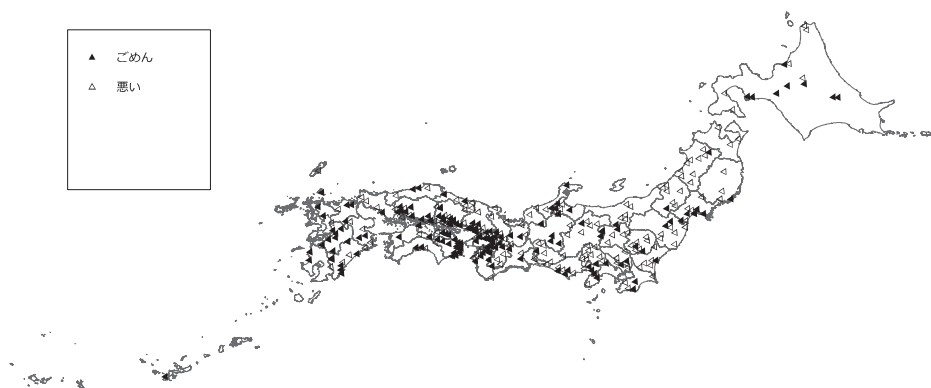


図11 中高年層：後輩に対する謝罪表現「ごめん」VS「悪い」

図11も同様に目下に対するもので西日本型分布を示す「ごめん」と東日本型分布を示す「わるい」とを対比させたものである。中高年層の調査結果では、比較的明瞭な分布対立を確認することができる。一方、大学生の結果ではこのような分布上の対立がみられなかった(図は掲載しない)。例えば西日本型の「すまない」だが、大学生には「すまん」という形式が使われなくなっているのを確認できた。また東日本型の「悪い」は東日本に限らず西日本でも使われるようになっているため、中高年層の結果(図10)と同様の東西対立型の分布とは言えそうにない結果となった。一方、図11で西日本型の分布を示した「ごめん」は大学生調査では全国各地で軒並み高い使用率となり、中高年層でほとんど使用が確認されなかった東北地方でも高い使用率を示すことになった。大学生では従来、東日本で使用されてきた「悪い(ねえ)」といった形式に代わって「ごめん(な・ね)」の使用がすさまじい勢いで増えている。

5. 今後の課題

方言学の研究では、例えば方言語彙や文法形式など方言形式の変種を対象にした地域差の研究であり、発話行為の地域差とか言語外の諸要素、換言するなら言語の運用面での地域差であるとか、文化的背景の相違による慣習上の違いや言語行動様式の差異などについてこれまであまり研究の対象にはならなかったことが、徳川宗賢(1981)で、つとに指摘されている。昨今、小林隆・篠崎晃一(2010)、小林隆・澤村美幸(2014)など、方言研究の新たな分野として配慮表現の研究が盛んとなっている。

今回の配慮表現の全国調査を皮切りに言語行動の地域差をさらに深く究明すべく、対人配慮という視点から地域差の解明を目指したい。

参考文献

- 岸江信介(2014)「現代語の依頼・禁止に見られる配慮表現」『日本語の配慮表現の多様性』くろしお出版.
- 岸江信介(2018)「断り」という言語行動にみられる特徴」『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房.
- 国立国語研究所(2006)『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所.
- 小林隆・篠崎晃一(2010)『方言の発見』ひつじ書房.
- 小林隆・澤村美幸(2014)『ものの言いかた西東』岩波書店.
- 清水勇吉・石田基広・岸江信介(2011)「依頼に対する断り表現について」『言語文化研究』徳島大学.
- 徳川宗賢(1993)「ことばづかいの風土性」『方言地理学の展開』ひつじ研究叢書：言語編第1巻.
- 徳川宗賢(1981)『日本語の世界(8)言葉・西と東』中央公論社.
- 山岡正紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現』明治書院.

【付記】本研究は日本学術振興会(JSPS)科研費15H03211の助成を受けたものである。
(奈良大学)